

# 三津浜地区活性化計画

## 目次

1. 計画の背景と目的	1
2. 三津浜地区の地域資源	5
3. 新たなまちづくりの動き	7
4. 三津浜地区活性化計画	11
(1) 三津浜地区活性化の基本的考え方	
(2) 三津浜地区の活性化方針	
(3) 取り組みの具体的方策	
5. 全体スケジュール	22

平成 26 年 7 月

松 山 市

# 1. 計画の背景と目的

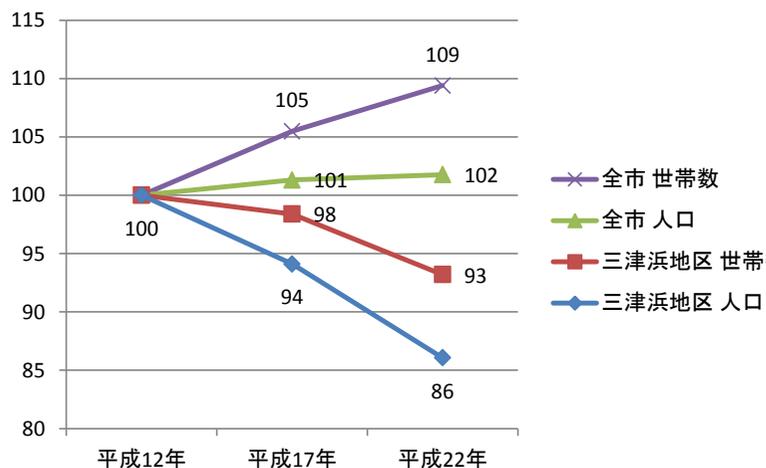
## (計画の背景)

松山市の西部に位置する三津浜地区は、江戸時代には松山藩の御船手組（船奉行所）が置かれた港町で、漁業や商業で栄えたまちでした。明治期には正岡子規や秋山兄弟もここから出航して上京するなど、明治から昭和の中頃まで、松山と本州や離島を結ぶ海の玄関として、あるいは松山市の物流の拠点としての要衝となっていました。

しかし、近年においては海から陸、空へと交通手段が変化したことに加え、近隣の高浜旧港、松山観光港等の整備によって、三津浜地区の港町としての相対的位置づけが大きく変化しています。

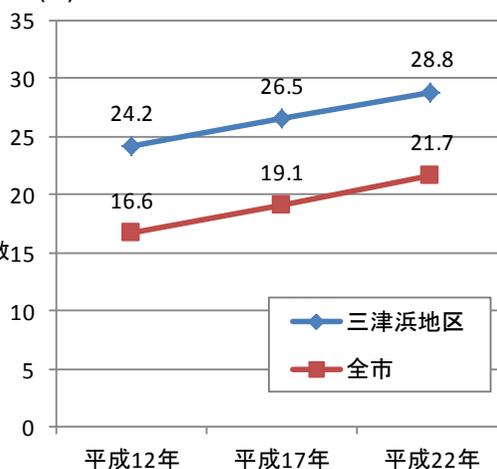
近年の三津浜地区の人口及び世帯数は、平成12年から平成22年まで一貫して減少傾向にあり、平成12年の人口6,297人がこの10年間で13.9%（877人）も減少し5,420人となりました。また、高齢化率（全人口に対する65歳以上人口の割合）は増加傾向にあり、平成12年の24.2%が平成22年には28.8%にまで上昇しています。さらに、三津浜地区の事業所数・従業者数も減少傾向にあり、まちの活力の低下が顕著になっています。

図1 人口・世帯数の推移



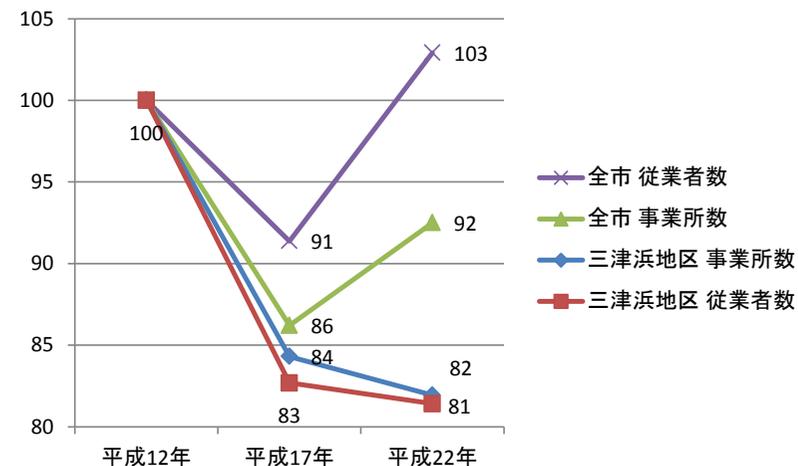
資料：国勢調査（平成12年=100）

図2 高齢化率の推移 (%)



資料：国勢調査

図3 事業所数・従業者数の推移



資料：事業所・企業統計調査（平成13年・18年）  
経済センサス（平成21年）  
（平成12年=100）

## (計画の目的)

松山市内には、小説『坂の上の雲』ゆかりの史跡や地域固有の貴重な資源が数多くあります。これらの地域資源をひとつの作品にたとえ、市内全体を「屋根のない博物館」として捉えた、「『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想」を掲げ、回遊性の高い物語のあるまちづくりに取り組んでいます。松山城周辺をセンターゾーン、その回りに6つのサブセンターゾーンを配置していますが、三津浜地区は「三津浜・梅津寺地区」として、サブセンターゾーンの一つに位置づけており、それぞれのゾーンの魅力や個性を地域住民が主体となって磨き上げ、「松山らしさ」を活かしたまちづくりを展開しています。

また、本市では安定的かつ継続的なまちづくりを推進する、「松山市地域におけるまちづくり条例」を平成21年4月に制定し、市民が主体的、自発的に地域のまちづくりに関わりながら“一人でも多くの人を笑顔に 全国に誇れる、わがまち松山”を実現し、その感動を市民と行政がともに分かち合うことを目指しています。

このような中、三津浜地区では、住民が主体となった「三津浜地区まちづくり協議会」が平成22年5月に設立され、にぎわいの創出と生きがいのある暮らしを実現するため、「三津浜地区まちづくり協議会事業計画」を平成25年4月に策定し、多様なまちづくり活動に取り組んでいます。

本計画は、地域や住民の動きを尊重しながら、地域の振興を図ることを目的として、三津浜地区の地域住民や民間によるまちづくりへの機運を一層高めるとともに、三津浜地区のにぎわいの創出や交流人口の拡大を図るための活動の指針となる計画を策定するものです。

## 参考1 「『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想」における「サブセンターゾーン」の位置づけ

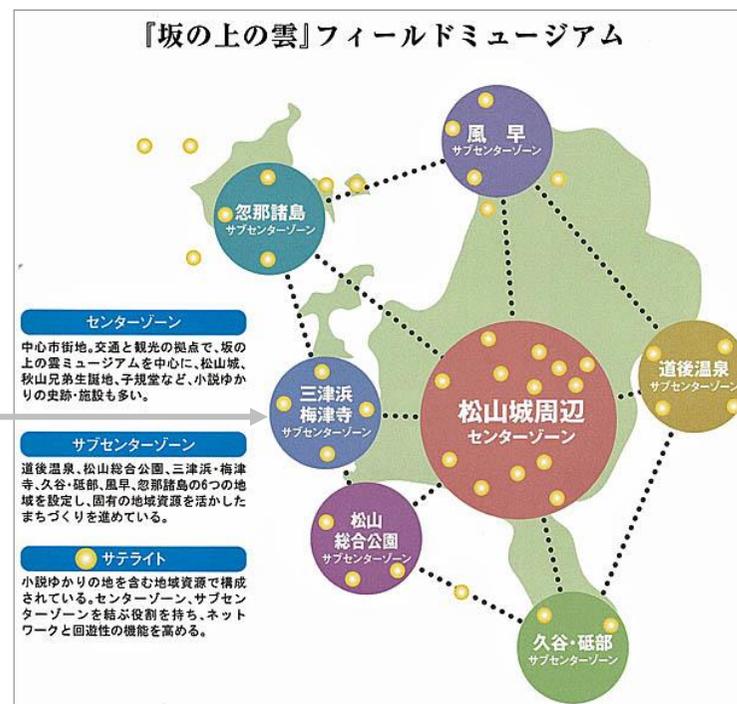
司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』は、激動の明治時代に主人公3人が抱いた高い志とひたむきな努力、夢や希望を描いており、本市では、それらの要素を活かした、『坂の上の雲』を軸としたまちづくりを進めています。市内には、松山城をはじめ、小説ゆかりの地が各所に残っており、それらを市民と行政と一緒に再発見し、活用して、まちを元気にしていく取り組みを「『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想」として掲げています。

「『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想」では、松山城周辺の「センターゾーン」を中心に、6つの「サブセンターゾーン」を配置し、それらが一体となって「松山」ならではの文化性・物語性を発信していくこととしており、「三津浜・梅津寺地区」もサブセンターゾーンの一つに位置づけられています。

本計画（三津浜地区活性化計画）は、このサブセンターゾーンの三津浜地区を対象としています。

「『坂の上の雲』を軸とした21世紀のまちづくり基本構想」（平成12年3月、松山市）における「三津浜・梅津寺地区サブセンターゾーン」の記述内容

『坂の上の雲』の主人公たちが郷土を旅立ったゆかりの深い地区であり、秋山兄弟の銅像が建てられ、歴史的街並みも残されるなど、市内中心部からのフィールドミュージアムの広がりを示す拠点として重要である。



## 参考2 三津浜地区まちづくり協議会の方向性：「にぎわいの創出と交流人口の拡大」

三津浜地区では、地域や住民が主体となった多様なまちづくりが展開されてきました。

平成 22 年 5 月には「三津浜地区まちづくり協議会」が発足し、平成 25 年 4 月に「三津浜地区まちづくり協議会事業計画」を策定して、地域や住民主体のまちづくりを計画的に進めていくこととしています。

まちづくり協議会が策定した事業計画の「重点的な取り組み」の中では、4 つの内の 1 つに「まちを元気にするまちづくり」が掲げられています。

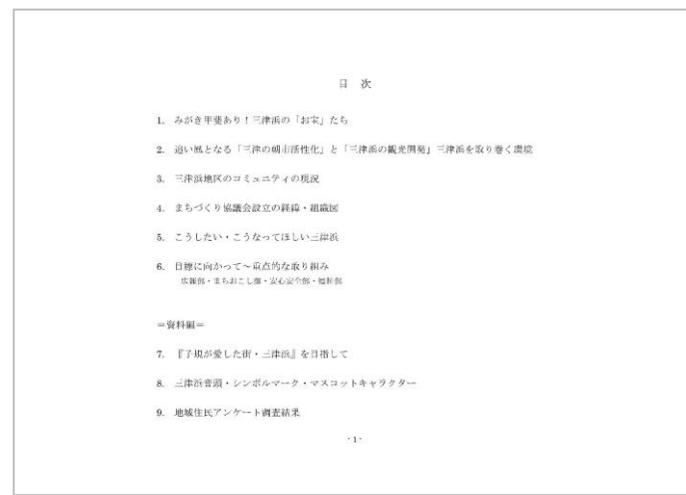
そこでは、「三津浜地区のにぎわいの創出による集客」や「史跡・古い建物等の保存と活用」、「魅力的で効率的な回遊動線づくり」等が示されています。

本計画（三津浜地区活性化計画）は、特に、三津浜地区の“にぎわいの創出と交流人口の拡大”に結びつく具体的方策を示すものです。



## 「三津浜地区まちづくり協議会」の基本理念

安心安全に努め、にぎわいのある創出と生きがいのある暮らしの実現のための、住民主体のまちづくり



## 2. 三津浜地区の地域資源

にぎわいの創出や交流人口の拡大につなげるため、三津浜地区の地理的特徴や歴史的背景等を踏まえ、「①瀬戸内海と港」、「②近代建築・町家群の集積と景観」、「③“三津の朝市”と食文化」の3つの視点で、三津浜地区の地域資源を整理します。

### ①瀬戸内海と港

三津浜地区は、瀬戸内海に面し、かつては松山の海の玄関口あるいは物流の拠点として栄えた港町です。現在でも、三津浜港は、山口県柳井市と松山市を結ぶ航路や松山市と忽那諸島を結ぶフェリー乗り場があり、高浜旧港や松山観光港とともに、本市の海の玄関の一角を担っています。

また、三津浜地区は瀬戸内の新鮮な魚介が水揚げされる漁業のまちで、内港には漁船が並び、かつては、多くの魚の行商人がまちなかで魚を売り歩く姿が見られました。

松山港内港の三津と港山の間約80メートルを結ぶ「三津の渡し」は、市直営の渡船で生活道として、年中無休、無料で運航されています。近年では三津浜の魅力ある地域資源の一つとして、観光客にも人気が高まっており、年間で約4万人の方が利用しています。



三津浜港



三津浜港から望む興居島



三津浜港に係留する漁船



三津の渡し

### ②近代建築・町家群の集積と景観

三津浜地区は、かつては物資の集積・流通の拠点として栄えた港町で、松山市発展の礎をつくり、松山経済を支えた地域であったとも言われています。

当地区は、戦災に遭わなかったことから、かつての財や文化を物語る醸造業や金融、汽船、問屋などの近代的建築物や町家等の風情ある町並みが残る、市内でも貴重な地区です。



石崎汽船旧本社



町家が連なる町並み

### ③“三津の朝市”と食文化

三津の朝市は、応仁元年（1467年）港山城主の河野通春が城兵のため、米穀魚菜の類を近郊の農漁夫より購入したことに始まると言われています。

また、三津浜地区は古くからの漁師まちで、海産物の集散地であったことから、その後、物々交換や売買取引が盛んになり、このにぎわいがやがて“市”となったのが、「三津の朝市」で、伊予節の中でも松山名物名所の最初に謡われるようになるほどでした。

古い写真に残る「三津の朝市」の建物は、明治21年に完成した直径33mという巨大な円型の建物で、丸屋根をシンボルとして、昭和29年に崩壊するまで長らく市民に愛されてきました。

その後は、卸売市場として整備され、一般客の買い物はできなくなりましたが、地元からの要望を受け平成14年から「三津の朝市」という名のイベントとして、卸売市場内で毎月2回のほか、年に2回の拡大イベントが平成24年7月まで開催されていました。平成25年からは、水産市場運営協議会が「三津の朝市『旬・鮮・味まつり』」を、年に数回開催しています。

また、三津浜地区では、瀬戸の小魚などを活かした豊かな魚食文化が育まれ、鯛めしや松山<sup>ずし</sup>鮓などの魚料理が有名です。

近年、松山市公設水産地方卸売市場では、魚介類の取引だけでなく、魚食普及にも取り組んでいます。

魚以外にも、20を超える三津浜焼きの店が狭い地区内に集積し、じゃこ天や和菓子のお店、醤油の醸造蔵があるなど、食のご当地文化が形成されています。



明治期に建てられた「三津の朝市」



松山市公設水産地方卸売市場



三津の朝市『旬・鮮・味まつり』



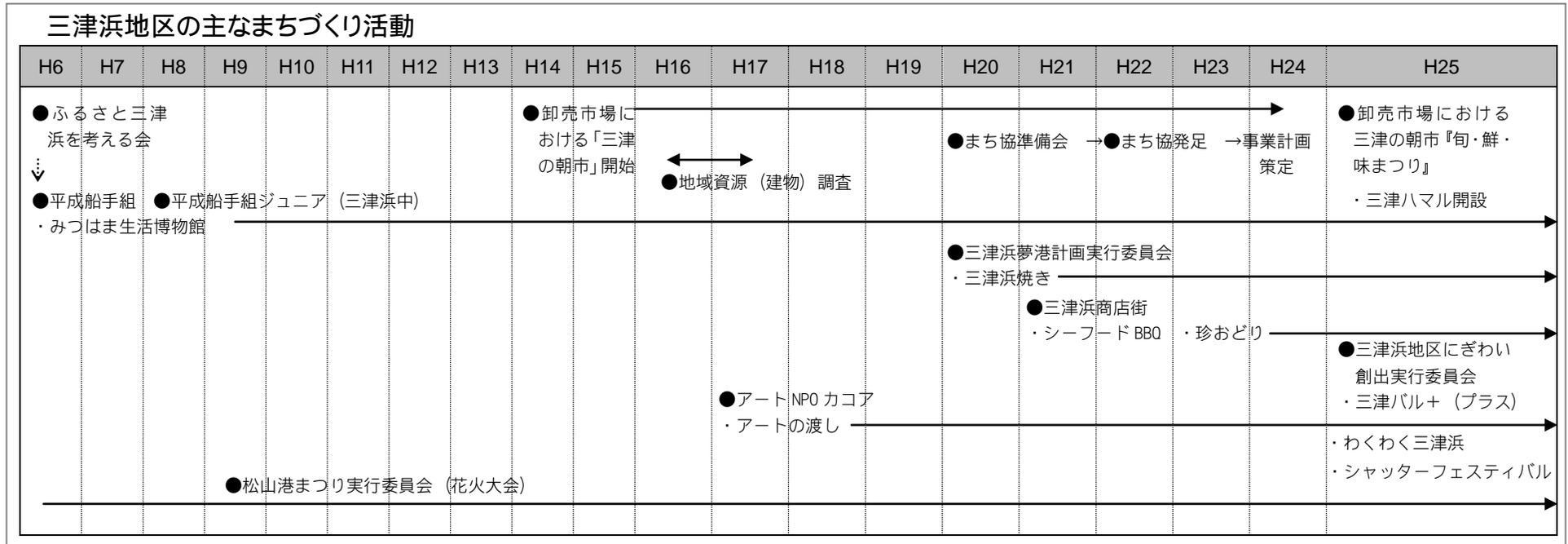
鯛めし料理



松山鮓

### 3. 新たなまちづくりの動き

三津浜地区では、平成6年頃から、地域や住民によるまちづくり活動が活発に行われてきました。近年では、外部からの新しい参加者も加わり、地域資源を再評価して、三津浜地区の活性化に向けた動きが広がっています。



#### ●活発な地元のまちづくり活動

平成6年に地元の有志が三津浜地区の活性化を目的として設立した「平成船手組」では、これまでに、地区内に数多く点在する町家などに着目し、「みつはま生活博物館」のマップづくりやまち歩きなどに取り組んできました。

さらに、平成20年頃から“食”を中心とした活動にも力を入れるようになり、三津浜商店街と連携した「シーフードバーベキュー」の開催のほか「三津浜焼き」のPRなどに取り組むようになっていきます。



みつはま生活博物館マップ



三津浜焼き

平成 25 年には地元の各組織の代表者などで構成する「三津浜地区にぎわい創出実行委員会」を立ち上げ、まちづくりについて協議・検討するとともに、交流人口の拡大を目指し、グルメ散策イベント「三津バル+ (プラス)」を開催しました。

また、松山の夏の風物詩となった四国最大級の「松山港まつり三津浜花火大会」では、企画・実行において地元も積極的に関わり、法人会員を中心に構成された西部地域開発協議会や三津浜商店街など、様々な組織が連携して、活発なまちづくり活動を展開しています。



三津浜焼きマップ



三津バル+ (プラス)

### ● 外部からの新しい風

平成 17 年からは、アート中間支援組織の「アート NPO カコア」によるアートイベントが、毎年、三津浜地区で開催されるようになり、アート作家やアート作品を見に来る観光客など、これまでとは異なる新たな交流人口が生まれています。

また、平成 23 年以降、商店街と三津浜地区に移住してきた若者たちが連携し、仮装して踊りながら練り歩く「珍おどり」が開催されるようになり、まちのにぎわいを創出しています。

平成 24 年からは、市内を中心にアートを通して街を盛り上げる活動を行っている「ワニナルアートカンパニー」が、商店街内の住吉公園で、毎月、第 1・第 3 土曜日に、オーガニック野菜やパン・菓子店など 5 店舗~10 店舗ほどが出店する「ワニナルバザール」を開催しています。また、平成 25 年 6 月には商店街の通りを会場として、「三津浜シャッターフェスティバル」を開催しました。

このように、三津浜地区以外から新たな若者が集い、これまでに無い個性的なイベントの開催や空き店舗や古い蔵などへの出店が進み、まちづくりの活動の輪が広がっています。



三津浜アート蔵



珍おどり



ワニナルバザール



シャッターフェスティバル

## ●町家を活かした店舗等の開設

三津浜地区では、町家を活かしたカフェや、資料館、地元の新鮮な魚介を使用した飲食店の営業が行われています。また、本市では平成25年4月に、三津浜地区の活性化やにぎわいづくりの拠点となる「三津浜にぎわい創出事務所（三津ハマル）」を開設しました。この三津ハマルでは、三津浜地区の空き家や古民家などの情報を収集し、利活用を図る「町家バンク」を構築しており、所有者と入居希望者の需要と供給のマッチングを図る事業や、地域資源を活用したイベントを構築するなど、三津浜地区のまちづくり活動の支援に取り組んでいます。

こうした取り組みを進めた結果、商店街の空き店舗や古い倉庫を活用し、ワインバーや洋服店などが相次いでオープンするなど、まちのにぎわいの創出につながっています。



三津ハマル



カフェ



補助金を活用して  
整備された資料館



新鮮な魚介を使用した飲食店

## ●街並み形成の取り組み

「伊予鉄三津駅」の旧駅舎は昭和初期の建築で、地域住民にも親しまれていました。しかし、老朽化が著しく、伊予鉄道、地元住民、学識経験者などで構成された「三津駅舎検討ワークショップ」によって駅舎改築の検討が行われた結果、アールヌーボ風のエントランスなど2代目の旧駅舎の特徴を残す建物として平成21年に改築されました。

また、三津駅から港に通じる商店街は、平成16年にアーケードが撤去され、平成22～23年度にかけて、街路の整備が行われました。



伊予鉄三津駅



商店街の通りの様子



## 4. 三津浜地区活性化計画

### (1)三津浜地区活性化の基本的考え方

現状において、三津浜地区には多くの魅力的な地域資源があるものの、いわゆる「観光地」という性格は弱く、また多くの空き店舗や空き家の存在がまちの活力の低下につながっています。そこで、集客につながるまちの魅力を高めることによって、新たなにぎわいと交流の創出を目指します。

『新たなにぎわいと交流の創出に向けて、魅力的なまちづくりに取り組んでいきます』

イメージ図



## (2)三津浜地区の活性化方針

「三津浜地区活性化の基本的考え方」に基づき、次の3つを活性化方針として定めます。

### 活性化方針1 地域資源を活かし、住民自らが活動できる環境づくりに取り組みます

三津浜地区の自然環境、歴史や文化、暮らしには、たくさんの魅力的な要素があります。大切なことは、地域住民がこれらの資源に魅力を感じ、自らが住んで楽しいと感じられるまちにしていくことです。

そのためにも、近年増えつつある町家等の空き家を活用して、外から三津浜地区に住む人や新たに地区内で生業を営む人を増やしていくことが必要となります。

そして、新たなまちづくり活動の芽を育てながら、「まちを歩くと、楽しい・おいしい・にぎやかだ」というまちづくりを推進することによって、三津浜地区の活性化を目指します。

### 活性化方針2 外から「行ってみたい」「住んでみたい」と思わせる「魅力」づくりに取り組みます

『坂の上の雲』フィールドミュージアムの「松山城周辺センターゾーン」や、「道後温泉サブセンターゾーン」など他のサブセンターゾーンへの来訪者に対して、まずは「三津浜のまちに行ってみよう、歩いてみよう」と思わせる魅力（発意行動魅力）づくりを行うことが重要です。

そのためにも、三津浜地区の魅力の一つである、ご当地の「食」をブランド化していくことが重要なポイントになります。また、海に面している地域であることの利点を活かして、民間による新たな拠点づくりの検討を支援するなど、外から「行ってみたい」「住んでみたい」と思わせる魅力的なまちづくりを推進します。

### 活性化方針3 多様な「住民」が活躍できる体制づくりに取り組みます

三津浜地区には、この20年間に培われた地域や住民主体のまちづくり活動の実績があるほか、近年では、外からの新しい風として、三津浜地区のまちの魅力に惹きつけられた若い人々の活動があり、住民や事業主など多様な関係者を有機的に結びつけ自主的な活動を促すとともに、具体的な活動の推進役となる中間支援組織をつくり、三津浜地区の魅力を外に向けて積極的に情報発信していきます。

### (3)取り組みの具体的方策

活性化方針を具体化するため、8つの方策に取り組みます。

#### <活性化方針>

#### <具体的方策>

#### 活性化方針1

地域資源を活かし、住民自らが活動できる環境づくりに取り組みます

方策1 町家バンクの推進と運営支援

方策2 民間主導の景観まちづくりに対する支援

方策3 にぎわい創出イベント事業の支援

#### 活性化方針2

外から「行ってみたい」「住んでみたい」と思わせる「魅力」づくりに取り組みます

方策4 三津浜食文化のブランド化の推進

方策5 地域のまちづくりと一体となった戦略的な誘客施設の検討

方策6 港周辺の憩いの場づくりの検討

#### 活性化方針3

多様な「住民」が活躍できる体制づくりに取り組みます

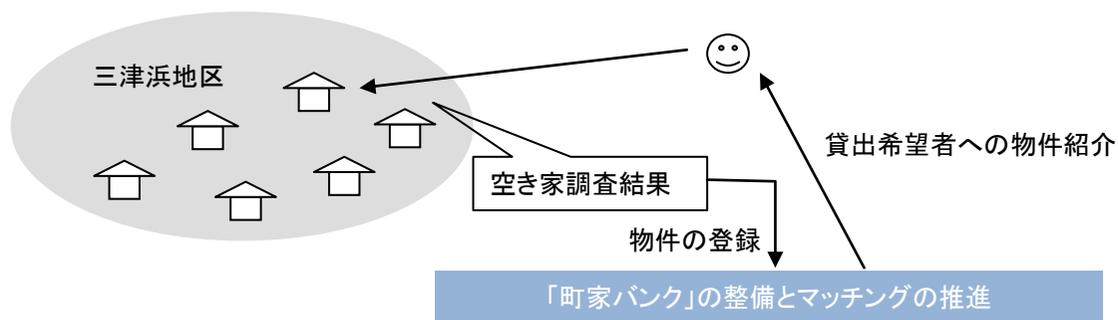
方策7 中間支援組織の構築支援

方策8 三津浜地区プロモーション活動の推進

## 方策1 町家バンクの推進と運営支援

三津浜地区では、平成24～25年度に、三津浜地区の町家等の空き家実態調査を行った上で、三津浜地区の空き家を登録制にする等、入居・開業希望者と結びつける「町家バンク」の仕組みを構築しました。

近年、三津浜地区で起業したいと考える若者等が増えており、これらのニーズを空き家所有者に紹介し、地域全体に広げていくため、所有者と入居希望者の需要と供給のマッチングを図ります。



また、三津浜地区において、特に残しておくべき貴重な歴史的建築物は、市としての保存・活用のあり方を検討していきます。

### 参考事例

NPO 法人今井まちなみ再生ネットワーク（奈良県橿原市今井町）

今井町に存在する空き家・空き地の所有者から、町家についての情報を提供してもらい、町家バンクに登録してもらうとともに、今井町で住みたい、借家を探している、町家を買いたいと希望している人にもバンクに登録してもらおう。入居希望者には、「今井まちあるき（空き家を紹介しながら町歩きをする）」に参加していただき、NPO 法人が紹介（橋渡し）する仕組み。（今井まちあるきは年4回程度実施）。



## 方策2 民間主導の景観まちづくりに対する支援

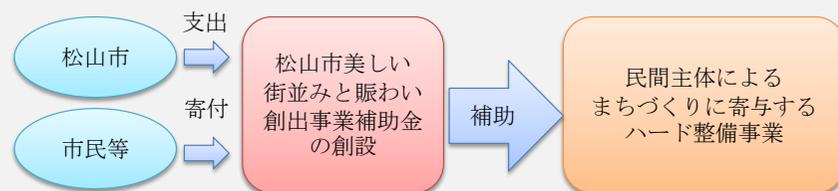
町家等の建築物は、松山や三津浜地区の歴史・文化を理解する上で重要な遺産で、多くの人を惹きつける魅力のひとつであるといえます。

これらの魅力ある建物がおりなす街並み景観を維持するためには、所有者による保全・改修を促進する必要があります。そこで、「松山市美しい街並みと賑わい創出事業補助金」を積極的に利用していただけるように、事業の周知や利用の促進を図ります。

また、建物単体でなく、町家等の古民家が集積しているエリアや、地域の魅力ある景観形成につながっている活動が活発なエリアについては、住民の意見を尊重しながら良好な街並み景観の創出と保全のためのルールづくりに取り組みます。

### (\*) 松山市美しい街並みと賑わい創出事業補助金

三津浜地区都市再生整備計画の区域では、民間による「歴史的建造物の保全・改修」、「ファサード整備」、「賑わいを創出する施設の整備」、「回遊性を高める施設の整備」に関して補助金を活用できる。



補助対象事業	補助金額
歴史的建造物の保全・改修	補助対象経費の3分の2 又は500万円のいずれか低い額
ファサード整備	補助対象経費の3分の2 又は300万円のいずれか低い額 ※補助率2分の1の場合も有り
賑わいを創出する施設の整備	補助対象経費の3分の2 又は500万円のいずれか低い額
回遊性を高める施設の整備	補助対象経費の3分の2 又は100万円のいずれか低い額

#### 美しい街並み景観整備事業

- 歴史的建造物の保全・改修  
概ね昭和20年以前に築造された歴史的建造物の保全・改修
- ファサード整備  
地域協定等に基づくファサードの整備

整備イメージ



松山市：ファサード整備

#### 賑わい創出施設整備事業

- 賑わいを創出する施設の整備  
交流施設、イベント広場等、賑わいの創出に寄与する施設の整備
- 回遊性を高める施設の整備  
案内板、石碑等、回遊性を高める施設の整備

整備イメージ



佐賀市：イベント広場整備

### 方策3 にぎわい創出イベント事業の支援

まちなかに、にぎわいを生み出すためには、四季を通じて、地域住民や地区外から来訪者が集まることができる数多くの機会を設ける必要があります。近年では多くの団体の活動により、三津浜地区のまちなかを回遊するイベントやまち歩きを楽しむ取り組みが増えました。

こうした活動に対して、市だけでなく、県や国、民間財団等の補助メニューなどを紹介し、あるいは民間企業との協働によって、持続可能なイベント事業となるように支援します。

#### 参考事例

『松山はいく』による三津浜の旅行商品

子規がこよなく愛した三津のまちで、お腹も心も大満足のツアーにご案内。

料金・お一人様 3,000円

出発・到着時間 10:30~12:30

集合場所 伊予鉄道高浜線三津駅

【立ち寄りPoint】伊予鉄三津駅▶風月堂▶練や正雪（木曜日は堀本かまぼこ）

▶カフェ田中戸▶遠藤味噌醤油▶鯛メシ専門鯛や▶三津の渡し▶伊予鉄港山駅



出所：松山はいくHP

#### 参考事例

日本タビカレッジ「タビカレ」（観光庁事業）

「タビカレ」は、国内の新しい観光地づくりの取り組みを応援し、今までにない78の観光地の魅力開発と旅行商品化を推進するため、国土交通省観光庁が開設したポータルサイト。

その1つである大阪府富田林市では、「楽食楽まちじないまち 暮らし文化と食のおいしい旅」と題して、毎月第2土曜日に季節ごとのテーマでまちを彩ったり、イベントを開催する「じないまち散歩」を実施。「寺内町四季物語」と題し、春夏秋冬の伝統文化を楽しむ催しやまち歩きツアーも行っている。



出所：「タビカレ STORY BOOK」（観光庁）

## 方策4 三津浜食文化のブランド化の推進

近年、「食」は、ご当地グルメやフード・ツーリズムなど全国的な人気の高まりにより、まちづくりのひとつの手段として広く認知されるようになってきました。その土地固有の食文化は、多くの来訪者を惹きつけ、その地域を訪れるための動機づけとなる魅力的な資源です。

食の多様化や魚離れによって魚食文化の衰退が言われるようになってはいますが、松山公設地方水産卸売市場では、魚食普及のために、郷土料理の復活など様々なプロジェクトに取り組んでいます。また、魚食文化の普及は、三津浜地区を“海に近づける（結びつける）”強力な要素にもなります。さらに、地元で親しまれている「三津浜焼き」は、全国ブランドになる可能性があるとの評価もあります。そこで、三津浜地区の食文化をブランド化するための様々な取り組みを推進します。

### 参考事例

富士宮やきそば（静岡県富士宮市）

「富士宮やきそば学会」を設立して、2000年からまちおこし活動がはじまり、全国的に取り組みが広がったB級ご当地グルメの火付け役。

毎年2日間で数十万人の集客力を誇る「ご当地グルメでまちおこしの祭典！B-1 グランプリ」では、地域ブランドを確立するための活動をしている全国各地のまちおこし団体の、年に一度の共同PRイベントとして認知されている。



### 参考事例

日生かきおこまちづくりの会（岡山県備前市）

2002年に活動開始した「日生カキお好み焼き研究会」が前身で、2011年に現団体名に名称変更。2008年に愛Bリーグに正式加盟し、2011年の第6回B-1 グランプリ in 姫路で第9位入賞（初出展）、2012年の第7回では第5位に入賞し、「カキオコ」の認知度が飛躍的に高まった。

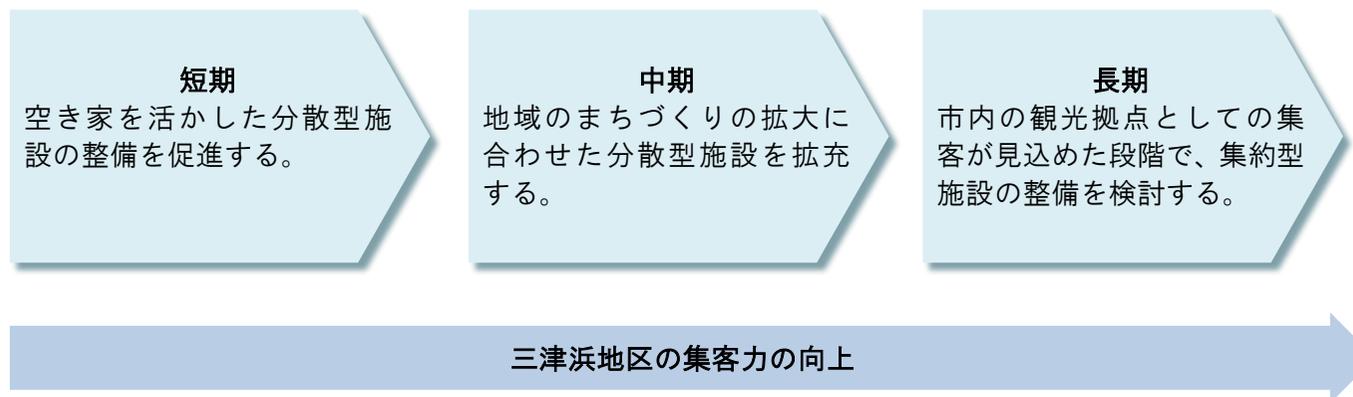
備前東商工会が事務局となり、「カキオコ」の商標登録も実施。シーズン問わず、県外からも観光客が訪れるようになってきている。



## 方策5 地域のまちづくりと一体となった戦略的な誘客施設の検討

『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想の「三津浜・梅津寺サブセンターゾーン」では、基本計画書の事業メニューに「三津の朝市の活性化」を位置づけています。また、「三津浜地区まちづくり協議会」は、三津浜地区まちづくり協議会事業計画の中で「三津の朝市活性化」に強い期待を寄せています。さらに、平成23年度に実施した、市民アンケート・観光客アンケートでは、「瀬戸内のおいしい魚の販売・飲食拠点」に対する高い意向が示されました。

こうしたことを踏まえ、短期的・中期的には、空き店舗等を活用した分散型施設の整備を促進・拡大していきます。そして、三津浜地区への集客力が高まった後に、利用可能な土地を活かした集約型誘客施設の整備について検討を進めます。



出所：「三津浜地区誘客施設整備に伴う事業化可能性調査報告書」（平成25年12月）

## 方策6 港周辺の憩いの場づくりの検討

地元からは市民が集い憩いの場として利用が可能なスペースを港付近に設けることが求められています。

そこで、方策5に掲げた「地域のまちづくりと一体となった戦略的な誘客施設の検討」の進捗状況に併せ、三津浜地区の最大の地域資源である海を感じることができ、市民が憩うことが可能な場所の整備について検討します。



三津浜港



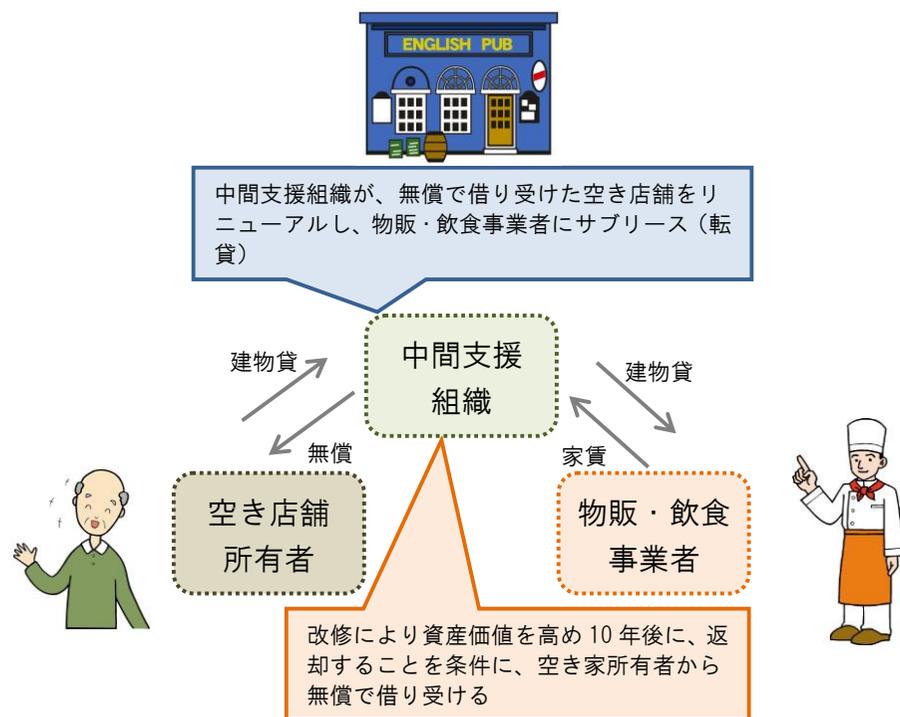
三津浜港から見た興居島



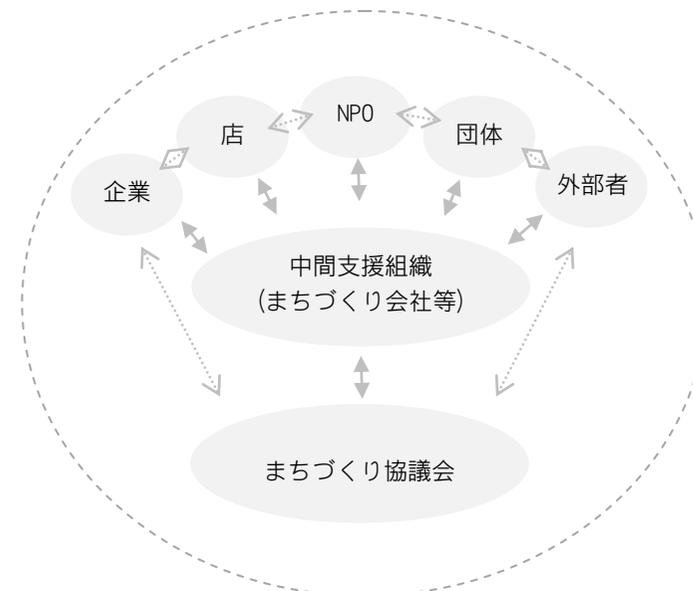
## 方策7 中間支援組織の構築支援

まちづくり協議会は、ネットワーク型の住民自治組織で、地元のまちづくりにおいて中心を担う組織ですが、協議会には属さない民間企業やNPO等の各種団体も三津浜地区では数多く活動しています。

今後、そのような様々な団体が協力・連携できる体制の整備や空き店舗をまちづくりに活かすシステムづくりなどの役割を担え、まちづくりの「要」となる中間支援組織の構築を支援します。



空き店舗のサブリースを担う中間支援組織（イメージ）



三津浜地区における多様な主体の協力・連携ネットワーク（イメージ）

## 方策8 三津浜地区プロモーション活動の推進

三津浜地区の認知度を高めていくためには、雑誌やテレビなどのメディアへの露出や、SNS<sup>(注)</sup>（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）による個人レベルでの情報の拡散など、多様な媒体を活用した発信力の向上が今後一層求められています。

集客効果を高めるため、ニュースや記事として取り上げられることを意識した、三津浜地区のプロモーション活動を三津浜地区まちづくり協議会や他の地域団体が連携し、戦略的・積極的に推進していきます。



首都圏向けフリーペーパー  
「暖暖松山」(松山市)



松山市メディアプロモーションブック

(注) SNS：個人間のコミュニケーションを促進し、社会的なネットワークの構築を支援する、インターネットを利用したサービス（フェイスブック、ツイッター等）のこと

## 5. 全体スケジュール

	短期(5年以内)	中期(6~10年)	長期(10年以上)
方策 1 町家バンクの推進と運営支援	→		
方策 2 民間主導の景観まちづくりに対する支援	→		
方策 3 にぎわい創出イベント事業の支援	→		
方策 4 三津浜食文化のブランド化の推進	→		
方策 5 地域のまちづくりと一体となった戦略的な誘客施設の検討	→		
方策 6 港周辺の憩いの場づくりの検討			→
方策 7 中間支援組織の構築支援	→		
方策 8 三津浜地区プロモーション活動の推進	→		